



Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.148
2016.1.1
謹賀新年

*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

加曾利B式土器

— E.S. モースと坪井正五郎のはざまで —

鈴木 正博

● 第7回 ● 土器片研究の指導方針・その3

坪井正五郎は土器片研究に形態学的分類による数量化を導入、統計学的手法を駆使し、モースの大森貝塚を近代化した。しかし、当節の学問趨勢にも強い影響を受け、後述するように西ヶ原貝塚の特徴をクラスタリング操作した後の独自の思考法に懸念が多く、各クラスターから成績の一番良いもののみを選定する操作には「優生学」の影響が見てとれる。後代の山内清男も遺伝学に学び、壮丁の身体計測論文では最先端の統計学に通じているが、その分析射程は婚姻による遺伝関連性にあり、大きく目的が異なる。

さて、「土器の紋様の調査」は、全ての「土器片の総数」1,811片のうち、底部破片158片を除く「紋様調査に必要な土器片の総数」1,653片を対象とする。破片を具体的に扱う際に非連続な同一個体を複数片に数える不具合など、個体識別の原則についても論理的に確認する。

続いて1,653片の「紋様」分類を行い、分類順に破片数を示す。ここでは分類結果を()内破片数の多い順に示す。「席紋」または布紋は「席紋」と略し、第1位は縄紋施文の「席紋」(610)、第2位は「無紋」(419)、第3位は磨消縄紋の「廓内席紋」(191)、第4位は縄紋地に沈線の「席紋と畫紋との混交」(163)、第5位は条線文の「複線畫紋」(146)、第6位は沈線の「単線畫紋」(124)となる。

この結果を受け、「紋様」分類による破片数では「百分比例」が「決して土器其個数の多少を表しては居りません」と指摘し、

しかしながら厳密さに欠けることは承知の上で、「土器の大小を問はず、且つ紋様の全体なると局部なるとを問はず、広く土器の紋様なるもの総体に付いて、何れが最も好く目に付くか、何れが最も屢ば目に触れるか、何れが勝を制して居るかとの問ひに対しては前に挙げた百分比例が不十分乍らも答への用を為ると信じます。」(ゴチック体は引用者)と「百分比例」の示す新たなる傾向に期待する。

そこで本来は一次元6分類の「紋様」と二次元(7*8=)56分類の「装飾」を併せた3次元336分類のクロス表を作成する必要があるが、「装飾」が「紋様」の部分集合になっていることに注目し、圧倒的破片数の多い「紋様」は重み付け順位のみを利用し、以下の6種類の二次元クロス表にリダクションする。即ち、第1位の「席紋」*「装飾」クロス表、第2位の「無紋」*「装飾」クロス表、第3位の「廓内席紋」*「装飾」クロス表、第4位の「席紋と畫紋との混交」*「装飾」クロス表、第5位の「複線畫紋」*「装飾」クロス表、第6位の「単線畫紋」*「装飾」クロス表、という6種類の新規クロス表を作成する。この手続きにこそ坪井正五郎の数学的才能を見るならば、「モースは専門の教育を受けた人ではない。本来画工だ」と吐露する背景には周辺学問の進展状況が深く関係する。

ここから不幸にも「優生学」的真骨頂となる。6種類の新規クロス表とその所見(含む口縁部断面形態)など詳細は紙面の関係で省略に従い先に進むならば、坪井

正五郎は「紋様」の土器片数の多い成績順に既出の6分類から各々第1位の「装飾」のみを選定した上で、その6項目こそが西ヶ原貝塚出土土器の説明に最も有意であると考え、成績順に「西ヶ原第一様式」:「席紋」*「外無飾内一筋巻き」/「西ヶ原第二様式」:「無紋」*「内外無飾」/「西ヶ原第三様式」:「廓内席紋」*「外帯巻き内無飾」/「西ヶ原第四様式」:「席畫混交紋」*「外太縄巻き内一筋巻き」/「西ヶ原第五様式」:「複線畫紋」*「外点々巻き内無飾」/「西ヶ原第六様式」:「単線畫紋」*「内外無飾」、という「土器様式名称」を与える(口縁部断面形態は煩わしいので省略に従う)。

この「土器の紋様の調査」と「土器様式名称」方法に基き、他の遺蹟についても同様な調査を行い、必要に応じて固有の「土器様式名称」を制定すべき旨推奨しながらも、読者を悩ませるかのようその直後には(未完)のままで「西ヶ原貝塚探求報告」自体を終了させる。

畢竟、坪井正五郎は西ヶ原貝塚に対し他の追隨を許さない形態学的分類、および局所最適化した統計学的分析法の基礎(集計、比例、クロス表など)を実践したものの、(未完)のままの終了が謎とされるが、「土器様式」の構成に「優生学」的操作が見られる不具合以上に、坪井正五郎の「下に集まった俊才も多く貝塚の調査に全力を注がれた観がある」状況と軌を一にしており、羅針盤なき航海で新たに見出した社会論的研究展望が「西ヶ原貝塚探求報告」を中断させたのである。

※巻頭連載は隔月です。次回は再び神村先生です。

目次

■加曾利B式土器 土器片研究の指導方針・その3(第7回) 鈴木正博 …1
■考古学の履歴書 良き師・良き友に恵まれて(最終回) 渡辺 誠 …2

■リレーエッセイ マイ・フェイバレット・サイト(第141回) 高橋保雄 …2
■考古学者の書棚 『女真と金国(10世紀-1234年)の文化』川崎 保 …4

考古学の履歴書

良き師・良き友に恵まれて(最終回)

渡辺 誠

33. 原田先生の続き

原田大六先生に教えて頂いた大事なことがある。先生宅を辞去する時に、研究上留意すべきこと2点を助言して頂いた。

第一は、細かいことにこだわらず、死ぬ前にやっと答えが掴めるような大きなテーマを目指しなさいということであった。その達成のためにはすべき課題を検討し、その成果が章節として蓄積され、一冊の書物のようにしていくように心がけなさいと言われた。そして先生の場合はと伺って怒られた。そんなことも知らないで尋ねてきたのかと言われ、それは日本古代国家の形成であり、万葉集の研究もその一節であると教えられた。古代から近代に至るまで宝器であった鏡・剣・玉について、古代人がどのように考えていたかをよく知ることができ、その性質がよく分かる考古学者こそ最適であり、かつてに枕言葉にしてしまう文学者に任せてしまうわけにはいかないと力説された。

第二は、論理学の勉強をせよということであった。三一書房の文庫本に『論理学入門』といういい本がある。ソ連のピノグラトフの著書であるが、これは高校の哲学の教科書である。日本の考古学者はこんなものも読んでいないから、論争もまともにできないのだと言われた。帰京後さっそく島津義昭氏が神田でまとめて10冊買ってきて、研究会で読みあった。また第一のことも縄文文化の研究とはっきり目標を定めた。そして若干興味をもっていた例えば古墳時代の滑石製模造品などについても、一切書くことを止めた。私の抜歯や漁具などの研究は、縄文研究の一里塚になったのである。

34. 内陸部の遺跡と調査

前号で記したような、縄文文化の小文化圏を強く意識するようになってきた時に、それまで貝塚などの海岸部の研究に重点があったことを修正する必要性が大きくなってきた。

そしてその大きなきっかけになったのは、江坂先生のお手伝いで新潟県津南町沖ノ原遺跡の発掘調査に参加したことである。特に関心を深めたのは、縄文中期によく見られる環状集落跡であったことばかりではない。それまでに東北地方によく知られるようになっていた、長方形大型家屋址が検出されたことである。これは冬場の生活の厳しい豪雪地帯に特に多く、その形も屋根裏貯蔵にふさわしい形である。これを宴会のためという人もいたが、それでは床面を広くすればいいだけであって、円形でも方形でもいいはずである。

また炉跡も東北地方から伝わった複式炉がある。これは従来の炉に加えて、灰を蓄えるための土器をセットとして埋設している炉跡であり、トチの実の食用化と密接な関係にある。その時期は縄文中期の後半である。そしてこれらに伴っているのが、従来中期の前半の勝坂式土器の北陸版のようにみられていた火焰土器であった。

これらの特色は同じ中部地方でも、雪国の日本海側にしかみられないものである。小文化圏の設定にあたって中部地方を二分した大きな根拠であった。またこの新潟県下には、縄文の伝統を持つアンギンもあり、滝沢秀一先生などによってよく調査されていて、国の重要無形文化財に指定されている。その資料は十日町市立博物館に集中的に蒐集されている。滝沢秀一先生や博物館の阿部恭平氏には大変お世話になって、十分に調査することができた。また阿部氏によって紹介されためぐりぎ仏壇店の村山義郎氏を介して、福井県の箕輪漆行を紹介して頂いたことはありがたいことであった。特に黒漆を調整するのに鉄粉を使うとのことであり、内陸の長野県下でも砂鉄の入れられた壺が出土していることでも、その必然性をよく理解することができた。

沖ノ原遺跡の発掘と報告書の作成に際しては、館員であった小沢一弘氏をはじめ、平安博物館によく来てくれた学生諸子の協力が大である。特に同志社大学の長谷川豊・奈良崎和典氏、とりわけ別府大学OBの小池史哲の協力は大きく、ありがたかった。

35. トチの実食用化の民族調査

トチの実を用いた食べ物は、主にトチモチとして知られている。これはモチ米が前提になるからである。そうした地域は、東北地方から中国地方に限られている。しかしこれは弥生時代以後のことであり、米のない縄文時代には当てはまらない。そして粉だけを取る縄文的なコザワシというのがあり、岐阜県下の旧徳山村にのみかろうじて伝えられていた。

この調査は故安藤正義氏の大きな協力があつたからできたことである。また白川村には皮を剥くためのトチムキ石が伝承されてきた。その面はツルツルで、大抵の研究者は摩石だと言う。このことを教えてくれたのは、同志社大学の学生だった吉朝則富氏であった。そして同じ高山考古学会の野村宗作先生が同村の学校に転任され、私のトチムキ石とその台石の調査は一段と進捗した。逆に石器研究者への不信感が強まり、未だに納得しないことがある。

36. 人面・土偶装飾付土器

目下もっとも集中して調べているのは、人面・土偶装飾付土器である。これは長野県中・南部・同東部から山梨県にかけての内陸部で非常に発達したものであり、海岸部ではほとんどみられない。吉本祥子氏という共同研究者に恵まれたことも大きい。定年後山梨県立考古博物館に勤務したこともあったが、推挙して下さったのは大塚初重先生であり、即承諾の返事を申し上げたのは、これを身近で研究できるからであった。そして職員には同じように関心をもっていた末木健・小野正文・長沢宏昌氏らがあり、教えて頂くことも大変多かった。

長野県ではさらに多くの方々にお世話になった。平出の小林康男氏、諏訪の宮坂光昭氏、岡谷の会田進氏、茅野の鶴飼幸男・小林深志・富士見の平出一治・小林公明氏、伊那の赤羽義洋・友野良一・芝登巴夫・木下平八郎先生、小林正春・酒井幸則氏等々で、書ききれない。また長野県とは離れた地域で、すでに先行研究を行ってこられた神奈川県の太田英明氏、東京都の中村日出男・渡辺忠胤・佐々木蔵之助先生の恩恵も忘れられない。

これらは縄文土器の主形体である深鉢形土器を中心に各種の形態にみられ、その数は約800例であり、そのうち約700は撮影済みである。そしてその形態ばかりでなく、女神を表現して祭器として使用されていたらしい。これらはいずれ『縄文人の顔と心』と題して写真集を作り、日本文化の源流としての縄文文化を、世界に向けて発信したいとかがえている。

さてこれで私の連載もいよいよ終わることになったが、執筆を勧めてくれた故角張淳一氏、後を引き継がれた憲子夫人に御礼申し上げて、締めくくりとしたい。

略歴	
昭和13年11月18日	福島県平市大町(現いわき市)に生まれる
昭和32年3月	福島県立磐城高校卒業
昭和33年4月	慶應義塾大学文学部入学
昭和43年3月	同上大学院博士課程修了
昭和43年4月	古代学協会平安博物館勤務
昭和54年8月	名古屋大学文学部助教授
平成元年4月	同上教授
平成14年3月	同上定年退職、同上名誉教授
平成15年4月	山梨県立考古博物館々長・同埋文センター所長(18年3月まで)
平成18年7月	日本考古学協会副会長(平成22年5月まで)

渡辺先生、お忙しい中数々の大変貴重なお話をいただきありがとうございました。150号からは、間壁忠彦先生・間壁霞子先生にご夫妻でご執筆いただきます。お楽しみに！

Jレーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 141

奥三面遺跡群 ～ 新潟県村上市

高橋 保雄

はじめに 学生時代に初めて発掘調査に参加して40余年、これまで宅地開発、道路・鉄道・ダム建設などに伴い、多くの遺跡の調査・整理作業に携わってきた。そのすべてが記録保存目的の調査であったため、現在、ほぼそのすべての遺跡は残っていない。1万㎡を超える大規模な調査から数百㎡の小規模なものまで、時代も旧石器時代から近世まで様々であった。けれど、どの遺跡の調査や整理も私にとっては、その時々楽しさや苦労があり、いまも印象に残っている。中でも最も長く遺跡の調査に関わりあった奥三面遺跡群は、特に印象が深い。



▲湖底に沈んだ奥三面遺跡群と周囲の景観

奥三面地域 新潟県の北部、村上市から東に約40km三面川沿いの曲がりくねった山道を車で遡ること1時間10分、険しい谷間が突然開けたところが、奥三面である。標高約200m、周囲は約3万haの朝日山地に取り囲まれ、近年まで外部との交通・交渉が困難な地は「秘境奥三面」と呼ばれていた。

発掘調査・整理 県営奥三面ダム建設に伴う発掘調査は、1988(昭63)年に始まり、1998(平10)年12月に終わった。その後3年の整理作業を経て、2002(平14)年3月の報告書刊行をもって、すべての調査が終了した。実に延べ14年にわたり、19遺跡、調査面積15万6千㎡、出土遺物(深箱)8,900箱、延べ作業員15万人以上を数える新潟県始めての大調査となった。

私は後半の6年間(調査3年・整理3年)に関わりあった。県営ダム事業であるが、発掘調査は朝日村教育委員会主体であるため、朝日村派遣という形になった。市町村職員であれば当たり前のことであるが、当初は年度予算案作成、年4回の補正予算案の提出、調査組織の管理など戸惑うことが多かった。加えて県内ではほとんど行われていなかった民間調査機関の導入・監理、前任調査者の整理作業、現地調査の管理・指導、開発部局との調整などを行った。しかし、次第に業務になれ、多少の余裕が出てくると、ダムに沈む遺跡群の調査をいかにに行い、良い記録として残すか、ということを考えて。結局、私の調査指導不足もあり、調査員がやりやすい環境作りを努めたように思う。もっとも新進気鋭の若い調査員は体力もあり、真摯に遺跡の調査に取り組んでくれた。また、ダムに沈む遺跡をどうすれば多くの人に見ていただくか、ということも考えた。地元の人への広報を使った周知、報道関係への積極的な情報公開、幸いにも毎年現地指導を

お願いしている文化庁の絶大な支援もあり、大手新聞社の夕刊に2ページにわたる特集が組まれたこともあった。遺跡の情報がたびたび報道機関に取り上げられると見学者も次第に増え、現地説明会では600名以上の見学者が来るようになった。

現地調査が終わりに近づくにつれ、ダム事業の終了に合わせた膨大な記録類・出土品の整理作業の対策、出土品や三面集落の民具の公開施設について考えるようになった。開発部局の理解があり、調査員・嘱託調査員約20名、作業員約100名の整理体制を作ることができ、各人の努力により、整理作業を終了することができた。資料の公開施設は奥三面の入口にある廃校を改修し、2002年「奥三面歴史館」を開館した。



▲奥三面歴史交流館

その後 私は2002年3月で朝日村を離れたが、2005年朝日村は『縄文の里・朝日-奥三面歴史交流館-』を開館し、奥三面遺跡群の出土品と三面集落の山村生活の民具を展示した(2008年村上市との合併で、現在は市が管理する)。また、これらの資料は村(市)教委、県教委文化行政課の努力により、文化財指定された。県指定(2003)樽口遺跡出土品：旧石器時代～縄文時代草創期の考古資料3,000点。国指定(2007)越後奥三面の山村生活用具：有形民俗文化財734点。国指定(2015)元屋敷遺跡出土品：縄文時代後期～晩期の考古資料2,283点。

おわりに かつて発掘調査した奥三面遺跡群は、現在、ダム湖底に沈んでいる。しかし、周囲の景観は、当時とほぼ変わらずに残っている。1985年に離村した三面の人々が「山に生かされた」と形容されたように、自然と共に生きた縄文時代の人々の景観もほうふつとさせてくれる。

一 奥三面の景観は、春新緑の5月、秋紅葉の10月が特に素晴らしく、奥三面歴史交流館の考古と民俗資料を見ると、かつてここで生活した三面集落の人々や、縄文人の暮らしが想像できる。是非、一度訪れて欲しい地である。一



▲国指定重要文化財：元屋敷遺跡出土品

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは滝沢 規朗さんです。

考古学者の書棚

「女真と金国(10世紀-1234年)の文化」

M.B.ヴォロビヨフ 著/ナウカ (1983)

川崎 保

入手困難である。しかも露文である。読解は容易ではない。恥ずかしながら、ロシア語は未だに挨拶くらいしかできない。よって、いろいろな人の助けがあったとはいえ、ただ読むだけでも普通の本の10倍以上の労力がかかった。それだけに本書への愛着もひとしおである。また、私のささやかな研究の一助になっただけでなく、「家族の歴史」の一部にもなっている。ここに取り上げることを許されたい。

独身最後の頃、ロシアで資料調査をした。本来の目的ではないが、女真文字が書かれた銀製の札を偶然実見できた。この女真文字をどこかで見た記憶があり、詳しく調べることにした。当時ロシア語教室でいっしょ学んでいた女性(家内)に相談すると、研究書がきつとあるはずだからそれを参照してはという。いきなりロシア語の論文は無理だが、翻訳された資料をもとになんとかまとめる。

このことを大学の恩師の森浩一先生あてに手紙で書くが、「ロシアに行けてよかった」という返事が来たのみ。あまり見込みがない分野なのか…。忘れていたところに、私たちの結婚式に先生が来られ、唐突にこの女真文字の話をした。「嫁さんに解説させて(誤解!)論文を書くとは、抜け目のないやつ。しばらくはあちこちいけないだろうから、その間にワシがいろいろ探訪しておく。」もっと研究すべきということか。

阪神淡路大震災後の復興支援で一緒にロシアに詳しい枡本哲さんに、女真関係の適当な文献がないかをうかがう。早速紹介して下さるが、自分たちの語学力から見てセレクトすべきか。どれから手を付けるべきか判断が難しい。神田神保町のナウカ書店に行ってみたところ、家内が本書を見つけた。字が小さく難解そう。いい値段がする。

しかし、枡本さんのリストにもあることから思い切って購入し、二人で翻訳し始めてみると著者のヴォロビヨフ先生は、英独仏語は、もとより中国語、日本語、朝鮮語に通じた歴史学者であり、漢籍を含む各国語の文献を縦横無尽に引用しているだけでなく、内外の考古学や民族誌研究の成果も踏まえていることがわかる。

なんだか面白そうであるが、一方で多くの疑問が出てくる。あらゆる手がかりを探してまわる。他の用事で訪中したが、「女真研究者を探し、疑問点を質問して。」とのこと。こんなことに対応してくれる研究者がいるのか。通訳をしてくれた女子学生に相談すると「私の父はいかがでしょうか。」中国東北史研究の泰斗王禹浪先生であった。疑問に答えていただけただけでなく、実地で勉強する必要性を説かれる。先生に連れられて各地の遺跡、建物や民俗に触れ、少しずつわかってくる。いろいろなことを知らないと歴史に迫れない。

また、私が参加していた研究会の名簿に、アレキサンダー・ヴォヴィン先生の名前を家内が見つかる。「所属はアメリカとなっているが、名前から見て、ロシア人ではないか。肩書も言語学者だから、日本語を解するはず。コンタクトをとって。」

おそろおそろヴォヴィン先生に話しかけると笑顔でご教示くださる。先生はレニングラード大学(現サンクト・ペテルブルグ大学)でヴォロビヨフ先生の警咳に接したそうである。「先生は、学問的にも、人柄も素晴らしい人だった。あなたの奥さんも興味を持っているのか。では、自分が滞在している研究室に、二人で泊まって勉強を

しませんか。」と誘ってくださる。猛暑の京都で研究合宿を行う。

ようやく本書の全体像が見えてきた。10~11世紀(あるいはそれ以前)の沿アムール地方、沿海州、旧満洲における女真文化、その後12世紀から13世紀の内モンゴル、北部中国と中部中国を含む金帝国の領域内での文化の発展と変容を本書は詳述している。目次は以下のとおり。



▲ミハイル・ヴォロビヨフ (1922-1995)



女真と金国の文化▶

第1章 1115年までの女真文化

- 1.生産活動
- 2.居住地
- 3.住居
- 4.衣服と装身具
- 5.食品と道具
- 6.家族と家庭生活
- 7.風俗と習慣
- 8.宗教と信仰
- 9.言語と文字
- 10.自然科学の知識

第2章 金の文化(1115-1234年)

- 1.生産活動
- 2.都市と集落
- 3.建物と家具
- 4.衣服と装身具
- 5.食品と道具
- 6.家族と家庭生活
- 7.風俗と習慣
- 8.宗教と信仰
- 9.言語と文字
- 10.碑文と金石学
- 11.書籍
- 12.文学
- 13.建築
- 14.彫刻
- 15.絵画
- 16.工芸
- 17.科学
- 18.教育

第3章 まとめと結論

- 1.懸案の問題
- 2.女真文化の起源
- 3.相互の文化的接触
- 4.文化的政治
- 5.文化的過程
- 6.女真の文化的獨創性
- 7.金滅亡後の女真の民族性と文化
- 8.女真の継承者

結び

本書は、女真文化を紹介しているだけではない。考古資料だけでなく、諸言語の文献資料や民族誌を利用し、女真文化のさまざまな文化要素を分析する。私が感銘を受けたテーマだけでも、鷹(海東青)、白鳥、犠牲、炕(オンドル)、送血涙、辮髪、雑穀(粟)、シャーマン、鉄鐸、耳飾等と多岐にわたる。

文化というものを、一面だけで語ってはならない。文化は、諸要素の集合体である。個別的に詳細に分析するだけでなく、有機的に結合させ、総合的に判断すべきということを著者は、繰り返し指摘する。

また、女真は単なる野蛮人ではない。偉大な現代中国文化の一つの基礎であり、重要な部分を担っている。周辺諸民族の文化を受容する一方で、影響を与え、東アジアの周辺文化とも相互密接に関係していることも明らかにしている。

当時の社会情勢から著者はソ連国外での現地調査はできなかった。現在の情報化社会からみれば、引用した資料に問題もあるかもしれない。しかし、著者の文化研究の視座は、極めて重要なものであり、本書の価値は今も不朽であると思う。

読者の中に、本書の内容をさらにお知りになりたい方がもしおられれば、筆者までご一報ください(kamo-sikamiti@nifty.com)。

アルカ通信 No.148

発行日 2016年1月1日
企画 角張淳一(故人)
発行所 考古学研究所(株)アルカ
〒384-0801
長野県小諸市甲49-15
TEL 0267-25-0299
aruka@aruka.co.jp
URL : http://www.aruka.co.jp